へ 13
3336
4

門へ13
3336
巻 4

大正 年 月 日
受 入

斐陪匠物語巻之四

笹生

○よめの君

山人いむらさきを船ゆて見うしあひて。川岸をかけもゝ里さゝゐよひゝまど。影をぶらよ見ぐさ三だ。せんさべあく。心あるぶ家ふかゝりて。一二日ゐ〳〵ゝ生ど。おとづきをぶらよ空事あ。思ひちゆみく。食夏も咽をとほるぶきぢ。松炭が許く人をうゝ。むらさをもとさゝやと。ひそうふ秋ちゝめ居ろ形うぶ毋裏ゝ出きあゝ。ふちゝ父の駅の最日なきぢ。精進物とそのゝく。佛前まゐねふせんとそ。おちゝもまちあひくあゝ〳〵ひゝぐ。山人みかきさして。佛壇の塵かきちゝそ。みあゝ〳〵とのゝつゝ。ゝ佛のおまへを見まぢ。小さき式紙佛のはひざのよふのせゝくあり。取り見ぢた墨ゝ玉川みさゝそてづくりさゝゝくふと書て。下の句ハあゝ。不審ゝ出ひゝく。毋ゝ向ひゝく。山ぢきゝ〳〵ハ。常ゝ目ふまぢる物

大正十五年八月廿九日
本大學出版部

ゆくゆいうある人の筆ようと空へ出で母がいたく。そまこそそこの父のちかづみ
ある日甚子細かくうく笠母てん。おのまいわと吐家の下女ふくあり名ふ。ぶく
なりなひしゝ父のよう。ひそうよあろざゝを見せなく。悲びくふ。かくらひ
てゐるよ本妻の笠きりぬひくいくくたらぶちねひりきだ。おぞゝ我をで。
親里よ出ゝぬひき甚時おの日懺妊ゝて。不とあく一人の男子をうゝぬこの
事本妻よの日笠えおぞゝいうある事う出来あんと。墓の上より。其子をば
玉川ある百姓のとようつをゝう甚時父君の筆ざさをよ玉川母さゝうを
てつうりさうくよ。あぞゝこの子のうくゝかあゝきゝ式紙よ一首をおゝゝ
ぬひく。半より吐式紙を引ざきて下の白い産子のまりよをさめ上乃
句の方ハ日甚よあづけく墨ぬひぬ甚後本妻も死ぬひゝ日ざ悼う事あく
てつ日を家母むりくぬひきさて赤んさゝつぎ母つぬゝをも生をうし

かの玉川の百姓も死ゝえうとて甚のちおゝづ日かよをゝつ日ざ。あと
かゝもあくあうくつうをゝ位る子の生死をぶよあゝざぞゝ家の内母く
そぐちおぞゝつぬゝのよさ力草あめるを行方ぶ母おゝぬゆうよあう果し
もあぞゝおき世ぞあうくるゝ涙をおゝつ詰日ざ山人も父のかくみ
の筆のあゝ笠くおまくびおゝいくぶきて。とのあ涙よゝ日よりかくよ
うう母の方より。かそどを荷ひく。薩ばゝえよ出う者あり。よく見日ぶゝ
我家のかそどあ日ざ盗人とさんあ日て山人とびおうくかそどあ子を
かけゝく引めゝさて盗人ふうきつて行うんとさるを母ゆくさきを立へぶて
ゝ白昼よ人の家よいる盗賊いぶゝあゝくほさんとのふぬさんいゝつく
母をつきのくる山人又とうつきてゆゝうぶゝと出ゝあ日ざ盗人あゝうある棒あう
とつて山人をおさをゝつゝとゆゝつく母をゝ。おあゝくおさをゝくえせ矢ひつ

頭うぶくとりて山人とを見まりくものをあぶぎ見をしがさきを獄
屋へ入りく廣間あり山人声をあげく汝まくもあつくをを冠をるふや
とらへぐ廣間うちぐきく国司の鷹よ引出さを汝らがくめよ家をらく記
おひ母くををる廣間あをぐいぐで汝らを恨こざくん今日くを入り
ぬをくるは汝が蓋を奪る衣類調度を奪ひとりさて汝親子を殺さんくあ
母忍びあくり死出の旅の用意せよといひさるをあげくをくあくるあくう
母その手をとりつくをひつとくへく一間だくり投つけてとく此世のいとを
とくせんとてくりやまかけりて庭下とつくをどり出をぐ母をおりてを
さてあげ出をを追ひけて切戸を出るよ出ひけを大ある男のきり戸ろ
そをとを立あるが廣間がもちくる庭下のぎをを足をあげて蹴ありくを
ぐあふむけよ倒をるを無かくうく走くくを踏つけく竹芝親子を

告せんとする汝あをを命くをけておきがくくとひひさる廣の岡
をかいつくを目より高くさくあげくをるひくを前ある川を投おくう
廣岡へあッとさんびくるをまるをよまをを流を行くを心地よくぐ見をく
くるかの男ハ老母ぐ手をとり切戸をいりて山人がおをを出くるををとかく
介抱くををこの上よ抱きあげく水やぐ飲せてあくうふを母いくを手をぎぐ
中あるひぶくくてをものづくのはくよおをくをををけてあくるぐ
と手をあをせつ禮をあをせぐかの男母ぐ顔をおまりてあをとをよを
たくく紙とり出くおをれおぐくおををあやくて出をを取おぐくくを
あぐてひくき見をぐ式紙のあぐきくくるあくよみ見をぐあみぐをの
このとくかあくきとあるくてあり母おどろきて此をきしハ我つまの手跡
あり。こを母をのちておちををいくあるくぐと不審ををぐかい男をるを母を

廣間
ひそろよ
山人が
家まいりて
物ぬきとく
山人ら所を
紋さんとして
棹ばかりいで
生あひ
あくそふ

きさりて頭をさげくゐにくるハおのゑとして初生の頃。玉川の百姓ぶゆくつ
たさゑ〜幼名ハてつくり丸そゆくゝゐまよ母親みおぐろきてつとそぶ。さ〜
よりてつくゞと顔をあげめて廿余年ハつぶてぬゑて。たの耳の黒痣〜らひ
おのざ〜も父君の顔よ見ん〜る而あり。初ハつぶ子のてつくりうゝて抱をうゝ
て。あゝ生さ〜山人も見ひよらぬ兄君の内対面と頭をさげゝよろこび泣よ涙
おゝせぢ母後をかきたゝひく。玉川の百姓の家ハ臨も不く死うせられべそと
の行方を尋んよ手がゝうあるべもあゝざゑゑでひゝで佛神の内あゞみまく。ひゝ
ゝひたゝめゞ。あゝ〜あんゝとゝがゑまゝとゝがゑ〜廿余年。鶴の年ゝね日ハあゝゝも。
見ひ生ぬ時ハあゝゝ〜を。あゞてゝく尋ねてハ来〜ざゝし今ハいづゝ子ゑさみ
てあゝぞゝと声ふゝを〜つ宜ゝだ。さんハおのゑ生つゝ〜ハ時人のゝとめゝゝと
ゝ〜ゑかゝとあゝ。おひそゞちハゞ。かの玉川の百姓ハゑゞ〜ひゝくうせゝく。

かゑハまゞあゞ〜〜ゝ時。おのゑ語ゝ問ゝ。つゞめゝ父ゝ。荏原郡ゝ。
瀬つゝゝてあゝ物さる。竹芝の某家ゆておゝさゝ本妻の姫ゝを生ゝゑ我家ゆて
そゞて家〜せつ打もあゝゞかゝとゝ往て親子のゝのゝ来ゝ〜ゝゝゑゝく
ハ不ゝ。ゝゝ〜ゞゞ芦屋の家の養子とゝあゝ。今の名ハ棹丸とゝてハゝ。語ゝも
あつぬゝ母ゝゝゝよりて。其芦屋どのゝとハ。いづゑの人ぞと宜ゞ。さゝハ我父と
不和ゝゝ。石濱ゝる船主ゝゝゝとゝゝゝ母も山人も又驚ゝて。ゝゝとゝ。
棹丸かさねてくゝハくゝる。おのゑ物の心を知りてよゝ。母人をとゝゝゝもんと
さゝる母養父船主どの〜詞をきけゞ。竹芝の家〜ハ。仇ゝ〜不和ゝゝと
ゝゝぬ。さ〜〜べ船主ゞ子と名のりてハ母人對面〜ゝゝ。ゝゝ〜かゝや
せゝ〜〜年月胸をゝゞさ〜〜ゝ〜みとゞその春。向ひゞ園の花見のゝ賣園ゞ
狼藉を見るゝ。顔をかゝ〜て其場ゝ。ゝゝ。ゝゝ人ゝたゝ〜ゝ。おのゑ

ありとよりも知りぬべし。其後廣國めいとくらまされて。かまどの家ゐ
おきまとゆくゑしらずとり返しまうせんと。廣國が家のあるじ。昼夜こ
あく伺ひしよりおもてまて松光がたちまちひまなく塀をきて出ぬ日なよう
うまうく沓丹おひまうせ。此家ちかきふまぐ。他供いつくしあづく。母くと
じう母。呼奇こぶ。其後別まうせ。おの子ぞ心を推まあまう語まぐ。
母親さてハ両度のうきあを恨ひしハ。おきとあくありけるうそふのいまぐで
さはあうで神佛の化現ゆ有がときくもおをくりとロよつけくひくう
しぐ。神あうぬ所ハおろう母ゆ。ときくおきとが沓よおをまて我子とあうで
ありけるよ。おきとが孝の心とぐまてけふの差をも道まう上給くくしき
親まの兄弟。対面まびぬるハけふの忌日の聖霊のあうぐしてあうくんと。
母ハまうあり山人も持佛を拜しよりとびけう。棹尼母の前よ手をつきて。

いひけるハ今日おまをくまうしハ母人ハおの子がねがふむねひ。ゆくめさまあんや
といだ。かく名のりあ上うハ所存あうべ何事もかくらひあをせてあう
ぐ。とく語りてあまといだ。棹尼涙をさうくとあがしておの子が妹をてい。
むうさきとヤ者山人をふうく赤くひ。春のあうより病ひつき命も危く
少ひしよ。ふうあくけひ病いえがとまあうくひど。墓の心ゆ山あとあく。
赤ひく山人の妻とあうんと。せちゆ母思ひさぐあていゆ。あを子母人の。此慈悲ふ
此婚姻とくのくなうべ。おの子が恨びハ。ひとよりあく妹が本望まあまをさ
ひくさまうあるさせぬひあんと思ひ入くねがふ母ぞ母赤ぐ頭かくふ事く
ありしぐ。娘心よ赤ぐうり我子を結ふあうざしうけひうざうい無仏母
似くまど父君の代より不和ありしぐ。世尼屋が家と縁をくとあが。あまぬ父の
佐ひあやそむきあん父君あがくくおをくまざくまをもとものくいさあ伝え

て、け婚姻成就せん事うよ。あつうひ少ゆべき事ど。亡人とあらねひねまいちん
かくもあさ事ぞかくとのくだ。棹先うおづきて。さとりある仰せ。
とのひつ。ふとところより封じらる。ひとひらの紙とり出し母が妻あさ
ぶ。け一ふい妹が嫁入の。ふるげの調度かくろく志るせて一通ひらひ
て。は質あるぐとのふよ心得ざまど。ひらき見まど。国司の廳まであらそ
田畑をかきらる券あり。棹先猶ひるい。竹芝の家と芦屋の家争論
よ及びしい。け券よ志るしたる田畑より。事おこりぬ。とまを返しふせぐ
なき父君の仕たる田畑。遺恨ハよもものこしぬ。とく。け券納めぬ妹が
ねがひをかなへくとのくだ。け券我家よかへしおこせるハそと一人のところ
あるぐし。養父ある船主どの。のぐで是をゆるさべきとのよ。棹先頭をふり
て養父がのよあるさざるをのぐでつくとくよたくしふべきとかくま。

け券をさめかへて。ちひく老母がふとところよおくへおもてのうよおらひく。
事ありぬとくくとのくだかくとよ待居くと見えて石濱が下人とも。
てんで丹白本の墓まきぬ綿ちどのせくるをおさくげ入来く。縁さきて
あくぶまで。嫁の君の輿と見えてあぐりよ車来く。庭よさをろくと母も
山人も。心あくぐ。あまりよ俄の嫁入よくくぐあるて。おまりる時よ輿の
戸をひくきて。立出る人を見まど男もよくぬ芦屋の船主あり。頭よ
伐衣の烏帽子うち見く。麻よい布の肩衣きて。よろぐひつ。縁よおりさぐ。
母も山人もおどろきて。又いうある凶事出来ぬくんと。胸とぐろきて立すりもち。
船主老母のかくよ向ひく。我むさあ。今日志ひく婚姻の一条棹先をゆて
さき丹中へくる丹うけひきぬとりくよ。満足くつ。山人母も今よりいと是
までの怨をのこさぐ。あがく朱陳のかくらひてくぐとらふよ老母さくみ

出くやさぞ夫婦一世のいとひ事よいを歴ぶる見ぞ見どうをもえらぶぞ
まそ俄よ女夫の盃をんいかるぐ志く〜くもめどきゆひちんまあ〜とまそもろみ
用意〜いをんま〜吉日をえらびなひく〜とあ〜おくりぬひちんとのふを
船主少もあ〜ぞ老の身い心みどかく〜若うり時のおとくのどうみ物を待は
ふんぞ見今志ふく夫婦の盃とりかをさせぬるぐ〜とのひつふとろ
より一つの位牌とり出て山人がそばは寄く位牌の娘の君へとくく盃
さ〜て〜ぐ〜のひさ〜て声をあげて泣いぶを山人いよく心もえぞいうみく
と色をかく〜宜ぐ棹先が見うる声をあげて妹い一昨日の夜ぐうう溢き
て死つるちやとのふよ山人たまひ失るぞうりみあうて何事のあうて死く
ぐそと舟をふをて棹先が傍よよ見ぞ船主涙をかきのどひて位牌を取て
ちあがめのひくるハ十四年の什と〜月春の花秋の月ふもめ〜て手のうちの

珠〜思ひて〜のつく〜みそぐ〜はるよ。そうあ〜見えてぬ家とあ〜つよく
おめ〜めぐ〜せぐ果報つ〜ふき生見ありうり心ひがう〜古翁がも〜たちく
のう志り〜をう〜ゆ〜ぶ ある顔もせぐ〜さぐ〜と部屋入りう〜り〜ぶ。胸よ
あまりて山人よそを見ぬ事と。思ひつめて命さそはるかをやさよ。さぞうりみ
思ふとう〜ぞ。まげてもあるをべうり〜を沙ゞ母の見をせあて娘ゞいのち
生けてくゞ〜ぞとう見をのく志るふびくよ。膳丹あ〜ふ晋よとほりて五勝ゞ胸
も鶏とあうわゞあく楚山のまうらの暦もかるよこそとふひあうきゆうき
娘をさきぶ〜せ老さう〜ぶつる志見ぬの。世よめよひく何うせんと。位牌を
つ〜ぶよそく〜。ゆぞう泣〜る血の涙ハ秋の深山の紅葉ぞを時ゞの染う丹
ま〜あ〜ぞ山人へ〜ぐ〜ふ〜て。かをあ〜ものくのあ〜ろやゆ〜ぐみよあをんと知う
ふ〜。涙う〜ぬと〜ろぞ〜も浅草野を色の嵐ぞうう。あ〜ともかをさぐ〜別を

てさ猶ありさ母を思ひつゝうきを宮々の門つゝよりとけ小舟思ひきりて
はおでゝ少しの水玉のをの絶えて〳〵あるかあるべきを見て声もそぐろ母は
あゝ〳〵老母もゝの袖をまぼりてさる真あるとゝろざしを石がひとゝ
さゝりおぞゝ又せんかゝるもあるべゝゝ子。いとほしの舟の黒そとゝく法華を取
て仏壇に居まぞ。山人立て涙あゝ金撥に水を入れ香爐無くゆゝうさ
一たきの。ゆゝありのさをもあつゝ〳〵。むせゝく見ぞ母親はかゝくみさをあゝ
嫩の君に娼よとゝかゝづゝ見まゝうばいゝざゝうを生せゝ見まゝうば
かゝあゝをつゝてぶさくせとゝはゝゝあゝ見まゝ又ゝもゝふゝてぞ法ふまゝ
棹先涙の袖をはゝひゝく妹が死せゝは悔てゝつゝぞ山人が妻とあり香花の
供養ゝうゝゝそ。かきがよゝとびまきまるぞ山上に立かゝり。野辺おくゝして。
ちゝの追善讀經ゝゝあゝんとのつぞ。舟主頭ゝもゝあゝゝき世の欲ゝ。

かゝづゝひ。竹芝の家と不和しあり。娘をゝ。先ひゝゝ右の裏の珠をゝゝ
見あゝゝねん夫のあゝまりあり。我ゝふゝゝびゝ家よあゝゝ。死ゝせゝむさあとそ
我ゝゝゝの善智識あゝ今よゝり諸国を経めゝゝひとゝまぐゝつゝゝ罪障
消滅。かゝハ娘が菩提のゝゝめ樹下石上を宿とあゝ。抖擻行脚の身とあゝて。
未世乃苦患をたさかゝゝんとぶゝく用意ゝあゝ見ゝあゝ。袋の鳥鉢
子ゝゝゝゝて。右の肩をあゝぬげぞ。のつの間よ刑おがちゝんまろがゝゝうあゝ
聖のさゝゝあゝ。墨染の衣をぞ着ゝゝゝる。棹先向ひゝもてゝゝゝゝあゝ出発ゝ
あゝゝ。あまゝゝ火急の出ゝゝもあゝ。せあて姉がゝゝの法華のゝゝあゝゝて
後振ぶちゝゝゝん事おそかゝゝゝ。出供よまゝゝんざるめゝゝ。文度用意を頭ハ
とゝのぞ。世をさてさてゝ出る者の何条供を思ひまぞき。家よかゝゝゝ。法華
供せよとゝは。あゝゝゝゝある詞あゝゝゝ。難のゝゝゝも知ゝぬあゝゝゝ

船主法師
山人冊
飛弾の匠
松光

廣岡
丸棹

者をさきまたて。まめやうある顔つくりていうで持佛の本尊をも見たる
ごきゝのやこのたどゝしさハかきくゝして家路もおぼつかんを事ハ思ひも
よらざ。けまくさぐるを食して遠き野山の露霜をかぶち雨風をかさう
して。艱難辛苦をくゝんハけ所の咎を娘めよ。あゞなふ者ぞとのひさて。続
おかむもあたをあり。かゝるを墨縄さきをもて。松光よ物めゝせさのことよ
のおりて。船主よむうひてのつゝハ出發ゑのうゝ。諸国に修行とうけ申そう。出服
どひのゝあ。ゝりてひとのひつ。ふとところより。ふき佛龕とり出て。あをハ拙
作ゑひゝども。降魔の像をておたゝませて。途中安穏の出祈ゑめと。なるあうと
さゝ出せば。船主あまゝゝびゝゝきて。取をさめぬ墨縄又松光よめゝさせ
つゝを前よさをさせくゝ入のつゝハらゝおの生ゝをゝ心をこめて作り出せゝ
木鶴あり長逗よつゝを生ゝをちん時ハ鶴よ無ありめたくたゞゑ羽うつく飛

ゆうん丹ゝ天空震因丹もひゝうねゝしゝと包をとけゝて木作りあゞくさあゞう
生るおとくあてゝゝ飛くひとゝゝび翼をひろげゝ虚空ふひゝゝんさゑあうゝう。
棹先とつて額よさゝげ。道のつゝ生を右まんハ丹まをゝきをゝ。をあむけゝも
ゆをゝゝと鶴をとつてくさゝ出せゝゝ船主墨縄よ出向ひ門君の厚意謝をゝき
よ詞あゝ。されど雲形の舟丹ゝ一鉢一衣丹ゝ事足りあん邪法幼術の外道
の師ありて話をゝんも心ゞゝゝ。ゝゝ折角のたま拾ゑゝゝ棹先丹護り
あゝゝて。あゞゝ代の寶ゝさせてん。棹先よくゝ空を用ひて家をゝめて山人
と兄弟のゝてゝゝみゝゝあゝゝゝ生我生かゝゝゝ時よあゝひくゝたゝゝを
行ゝゝをひくゝ無やくゝの罪をつゝゝゝゝゝ。のゝゝゝも堅固よ世をゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝのひゝて。古歩んとまゝ拍ゝゝ表のかゝゝをゝゝを人ゝ
あゞゝゝき見てあゝゝ以前の廣の固右月ぬきかゝゝぬゝゝゝゝゝゝ衣のゝ丹

たまき引ぬきて水に入りて大音よびわる八水に帰る報答せんとふたゝび
宮のまへ来て見るに。松光めも来るよ。おの星ちはおろの我うゝみ。ぎり丹
おくゝらまんと。太刀ふりあげて打て入るを。棹先得ゝうとかいぐり。太刀を
奪ひて。廣園がえりめとをつうんぐ。勝よ引さをて。あつ。おの星が眼おめ
をせむるとゝの事おゝぬ人非人めゝ。世のうを見ひゝあゝんゝゝ。
さる刀とりあげるを。墨縄ぎゝとおゝとぶめて。き毒つ極重の悪人とゝ
ども。おゝのさき毒の死ゝゝ。ひて。いまぶ。羅漢送もとげら星ぎ。かつ父君の仇
行の門出ゝゝひ付家も先人の忌日とさゝ。弟星ぎ。あつゝ。ゝそん事かゝぐよ
つきて不便あゝ。さ星ぎかゝのおゝき者付あゝゝ丹ゝもめゝぐゝびいらちある
冠をうつうまつりてんよゝゝ。我よよきたゝうゝとあゝゝ。縄とり出て。廣園
をゝゝうゝく。作る鶴の省丹おゝせゝく。縄のあまりを鶴のゝび足ゝ丹ひつけ

て。かゝる不當の悪人ハ日本の地丹をおくゝぐらぎ付まゝまぐよ。逃ひをもちて。
唐高麗くあゝゝおよちんと。赤鶴の尾をたゝとうてび。石忠義や。赤の鶴翅を
ひろげ。一声あゝくと見ゝるゝ。廣園を負ゝるまゝ。西をさゝ。千ぞ飛び行ゝる。
雲井ゆゝて廣園が声ゝて。あゝ星ゝゝと呼ゝるゝ。次第ゝ声も遠くあゝて霞
丹まぎ星て見えざるあゝぬ。今よゝぎめぬ墨縄が機巧のわゝをゝくゝゝ。あゝゝ
感ざるざゝりあゝ。船生法師庭丹おゝゝもて。我もかの鶴のぎゝく。ゆゝく
定めぎをあゝぬゝゝ。杖をひきつく立出る。人ゝもあゝゝもて涙とゝのゝ門
おゝゝて。袖をぎぼゝてゝゝ星ゝるとゝ。

○茅のゝぐち

芦ころ帝の使おきめゝ更衣ぎゝゝ。姫宮一人おゝゝ。ゝゝ。仕安ゝゝく
たをぎて。ゝゝがきゝ法かゝもゝ人よ。おゝゝ生ぎ。いゝゝの衣通姫ぎゝゝ。

かゝやひめ、世の人めでゆえり。たゞめは母の更衣里より内ひく。
法産あり。古きあらひして、古屋の上より人のぼりて、髢をまろぶ〳〵おとさせ事
ひり。女宮生まさせ給ふ。北へおとし。皇子は誕生ふを南へ落さとゝろ。やつし之
こゝろ。姫宮生まさせ給ひ。日あゝき雨ふりて例のごとく。屋の上へ人のぼり。時
大空より。鞠ばかりなる大きなる見こゝろ物。光りかゞやきて。棟の上へ落ぬ。人おそれ
て。屋の上へとゝろざして。目をとゞめて。ふるひあゝ。何事もあり。日を
ひゝきて見るに。屋の上に物あり。おびゝくよりて見れば。ひさごのおとき。かゝ
ちる物あり。いろ母も故ある物あるべしとて。屋をとりこゝ。母
語りて。ゐる母。希有の事ありとて。ものゝ人おどろきぬ。甚よゝ奏聞したり。
よきさがみや。あゝきさがみやとて。陰陽師宿曜師。さゝあり。書の博士。諸
山の高僧。ちよ。仰せありて。占ひやをべきよゝ勅あり。姫宮。人おそ

おそゝまさぐて。仙佛の仮よあまたあるべゝ。諸道の勘文。同じ
やうに。やゝ。ひとびとに。帝もよろこびおそゝまゝて。まゝこのもゝくぞおぼゝる。
姫宮うまれ出ひて。法ひ事かぎりあり。ひり。ひ事。醫師。法ひ。ひり
験者かんちぎあり。さゝく。祈りあり。ひ。ど。さゝ母。ある。見えさせ給ふ。
おびゝり。法ひ。いろ母。ひとゝ。ひて。あつひゆ。ある母。息所の
のひるい。生まれ出ある時。屋の上へ落ゝる。髢とて。故あるべ〳〵。そまを。桃
ゲとふ。を名。見よとこのひまとく。仰せのまゝ。母。枕上よりおきて。ひ。
さゝ。ひ。法ひをあげゝ。おびゝり。ひ。
いゝ。せひぬ。ひより。後ねびまさり。ひ。
常のまさぐり物。ひを。ある。姫。髢。法。かゝ。ひ。
きりひるかゝ。ゝる物。ひ。いろふ。柄杓。ひ。ある

廿一の文
ひるねの
人々
老彈の
まゑて
夫婦の
笠りし

形せり。此姫宮しそ〜あ〜ひかそざまで琴碁書画の道〜さくく〜きを
あく上手まくおさく〜ゝまで〜ゝまたゝ人をおさざ〜あ〜ゝ〜さゝゆへ
ゝり。ある日姫宮にまゐりておわりぬひらるまをみ見
ひるまり。あゝきく賤の家とおぼゆる所よりはごろ手あるゝ〜ひさごの
底まで切りてあり〜ゝまで。おどろかせひく〜ゝ是ゝ我をさあき時より。かゝつら
をあるぞ持あ〜しつる瓢あり。いろよあく〜とあるぞとのゆふ内より
人出来く〜と是を我家まあるく持つ〜〜〜瓢まてゆあんおとあきた
ゝ〜りあるいぞかゝる物のゆをんといふを見ゆ。鄙まはやづちきくあて
ある人あく物いひゝる声ゝさるやう丹おゝ〜ゝまで。志ぞ〜おまりておい〜
ゝう丹。かゝゝな匠の。木どもあつゝひくゝあるゝ入来くひよあゝ。此前まハ此
あるゝ〜と。ふゝき髪りおさせだ。女夫まありゆひあんとて手を取りて奥ざゝへ

而て行く。此家のさゆ若是て。あゝ〜ゝあるあゝ人も見ゆ是ゝさゝゝ丹謂度あゝはは
故ありげ丹くむくつゝくさ。而あゝ人のさゆあるあゝざ心あゝざゝあつり居
ゆ是ハ匠杯取出くかのうつゝくま人を我まゝよまゝあゝく杯ゝみかゝ〜あゝ
を此男を見ゆふよゝ。ゝゝ見〜ゝよりふちうまくうゝ〜ゝかりゝ是ハ
扨ゝあさ〜き人みゝゝあ是内ゝゝり丹行ふゝ〜ハ冠裝束あゝとゝうゝ
ゝ是さゝ〜ゝかゝちハ此人ハ似ゝる物ゝあ〜。ゝゝ是を此人の妻ゆてあゝ〜ゝと見ゝ
さて扨かゝ〜ゝひくおゝを極ゝひゝけさゝ父法門の法声〜て守とくまねきと
の夕人ゝ此男さゝゝを〜ゝを生ゝ。内ゝゝ〜ゝ〜ゝ敬ゝまゆひゝるゝ。汗ゆ
ゝゝゝまあり〜て。庭目さめゆひゆ。さるハ机丹ゝよりおゝ〜て。かり初ゝ見んあひ〜ゝ法義
おゝゝありゝる。庭側ゝさゝ〜ゝ〜ゝ人〜ゝ。ゝ湯あゝ〜ゝゆゝ丹おゝらゝ是させ
ゆひ〜あゝ内ゝゆをゝ。あげさせゆひさゝ〜ゝを此ゝのゝゝ丹ゆゝ〜ゝ黒ゝさゝある

暮るまこそあり久しさるまこそも今ひとしをびさら義を見ぞやとおぼして其のち
まこと更に机よりあんど出るもあるねぞまして義ちゆく見させぬふさとあり
しぐ見しもめげの条くてそぐもある出あおりひと成りてあらしくしさそ
なひ久し。

○都のわ

墨縄が船主げあつらへ堂つくりたて都よのぐり行ぐしして禅光よ別れて
山人げ分一来り久る。山人はむくきげ死らせしよ世中あぢきなく思ひとり
てかきあのりてのそくしあるしる丹村長のもとよりさしたる事あり
今来よしあ海よ来り久しぞ往るよそこの家ちとし夫役つと出ぬさ時よ
あしうぬとく生きもちて京登るぞとひふ見はそのらこと定る事ぞて國ぞく丹
百姓のかきりは京よまあのりて大内の下とありてく其職をつとむる事あり山へ

いあむぐきよあくねぞ。あしらけしく。家よ砂りく丹墨縄松光とく来てあ見
ぞ村長のいひつけ事を語る毋げのそくく。久しく見ひくう早きこ事あり。かく
田舎よさ居ひねぞ。みるびくる事は義丹ぐよ見ぞ。ひくづくよ草樹と成丹。
世を終くん事のあげくく。ひつく生きとを京ぞのぐせ有りく。ゐぞくあき都
のてぶりをも。見年まあしく。年ぐく男ひとくうはる丹。さひそ丹ちそあ見。まして
墨縄君もぼうあんぞ道のわぐくもおぞつくあくしぞ。我をくそその孫は。禅光
げあくく毋行くく。ひ丹の為りを待くぐく見ぞ。四丹かけぞしてしく生くちねとひ。
墨縄松光もくの丹よくまびくく。ゐくくの用意を。甚とありて禅光も来りて
ねんぐく丹ひくゐおひを。嬢丹を例の木馬ニそよく見とて。かそぐあどのぜて
おのく菅笠よひくぐつさきくく生くく。禅光は道まぐおくりく。毋をつ見ちく
石道一ゐりねさて三人は木馬をひきて。かくるくのりて行く丹。さをを水

作りあるとハさゝて作る者あり。夜ハとまり。あうつきをたちて
行くて。馬野とのふふまいりねゝ。持統天皇の衣服をせ旅め
あるゝふと。よばせかひゝ名どころふくいとひろき大野あり。人あまゝ集り
を見ざ。たゝざて見ざ。つゝき男の馬よのりて。走らせあゝり。見るゝ
ゐ物をる事。かぎりあゝ。弐男馬より下りて。かゝつゝきおりちゝてくゝる
むひていひるゝハ馬の性ハよく走る物なり。無人ゝ練を見ば良馬とひく
どゝよく走らざ。世よ千里を走る馬あゝば。おの生ゞ無ゝば二千里を走ゝ
ゞ。むゝ穆王の馬ハ足土を踐まざ。一夜の中よ萬里を行しとゝさ生ば。
馬の餌ハゝ走るよあり。世よいゝあゝ馬あゝるゝ。おの生命ありく手
綱をとゝんふゝ。よもふよ無りまを。見せ無ゝせんさゞて日本のゝち
よ。手綱の取りをゝを知りゝる者ちく又馬をよく走ゝさるものなし。

見物のくゝの中よ。よく馬を走ゝさ人あゝば。あゝゝをよ。おの生をあゝひて
競馬の勝負を試をゆ。おの生ゝまけくゝんあを弐頭をあゝさゞゝ
とうあゞをたゝきてゝいさねゝとあゝゝ顔あり見物の中よりゝゝきく人
生て。かゝ生ゝ馬をあゝゞて。走ゝさる物あ生ゞゞ命ゝひゝゝみたゝゝゞて。
皆半町あまり。繰りおゝ生ゝ。ゝふのあゝ。けあゝくゝいよく感ゞて。ほめ
ゝゝ生を弐男扇ゝち。ゝき。ひゞをいゝゝせて。おあふぎつゝひるゝ。おゝを
天の下よ我よまをゞき馬のりハあゝゝゞ。あゝるふゝる田舎よまあゝ人をゞの
ゝづゝよ耕のゝとゝ。よ。痩馬よのゝゝゝる分陰あゝく。ゝ生ゝゝ立あゝびて。ほゞを
走ゝゝせんとゝ。鳴呼ありとゝいゝん。かゝゝゝゝゝき事あり。ゝゝよ見物のくゝ
我頭あゝゝゝおゞさん人ハあゝ丹生つゝ。はゝゝりゝゝゞて。見ゝをゞゞとゝ。
てゝたゝゝゝよ笑ひく。ゝゝゝの上よ。文ゝかきて居ゝゝ。松光ふゝゝおゝひく。

孔雀
まのの匠
山人
松光と
とゆよ
京よ
のぎくん
さろ時
めくま野
まて

茶飯が
馬を走らせて
おころちをを
見て
まつら
松光
本作りの
馬よりて
かれと
猪頁を
あるそよ
而

ひそろ丹山人よさ〜ふ生さる八山男の馬をを〜らさ事をあ〜〜といつ〜〜
さきふおのを師の作り〜る馬よ無う〜〜かけさせ〜るみそ尽ぶ〜〜ぐ
山男あまりふ人も多げよわるが。わく〜生ぐ木馬を引出さ〜かを勝負を
あ〜ろうんと思ふありされど例のごと〜〜走りつ〜あ〜〜めと来し道よかつ〜
あん。とぐむづき時よ。とぐむづき法やひ〜〜ら〜ぐ墨縄笠ひく木馬の舌を
と〜〜て前よひろぐ怨とぐまるあ〜うよ作りてあり〜さを〜ぐ〜あきあ〜そひ
あをぐ無用あ〜とのつど。松光多い生ぐ馬よはけ〜〜ふかをどをおろ〜馬の
上よまぐ〜ぐり手綱とりてあ西ませく。かの男よひてるハのあふげおぐ〜〜
あ〜ぐ。世よ未曽有の馬のりおくおをきらんのざ勝負仕りてん〜〜といふ。
墨縄山人い笑ひをかく〜て見あ〜るよかの男い扇をつ〜ひをとく松光ぐ
分を見く。腰のさをざ名大方あ〜ぬい習ひある人〜見えてひ。おの生ぐ頭を

出所望よいやと云せ笑ひつ手綱とつ〜〜ぐ〜〜あのり松光ぐ馬丹鼻
をあ〜ぐてひざ〜いひさ名かけさせ〜〜り松光ひざと二三回おく生て。かを
させつ生ど。つよく綱を引つめつ生ぐ。木馬ハ矢を射ようあ生ぐ〜〜中を
と抜んぐを〜ぐあぬ松光馬場の堺あく〜木馬の舌を引々生ぐ安のごとく
とぐまりぬありかつ見生ぐ。かの男ハ一町餘りおく生〜〜り見物の人〜松光
をあめとよみて。か〜ま〜きまぐ〜さ〜ぐ扨馬をあ〜さよ〜〜むけ〜〜のごと
ふあ西ませく。かの男よおりひて。不思議よ勝を取りてひ。さ〜〜も天下丹知
あを人のいろ丹〜ておく生あひ〜〜といくだ。かの男手をきろて松光をを〜〜
て。あを生あ〜さを道の達人あ〜おを生ぐ〜るうふおの生七〜ヤを家よりの馬
術よ心を〜い生ぐ〜天下よ敵あ〜〜と存ぐ〜ゆよ君のおとき人ぐ。おを〜ふ〜〜
とう〜見おのの。かを〜ふく〜ぐり〜。契約あ生ぐ。頭をを〜〜ゆ〜〜といつだ

かの男頭をちぐめて。のひとつふつふつ。惜しとそ存せざるをどしぐ命の惜しくはまして田舎人の頭ちまで。都のつとゐを見ずてあくゆをんまでにつ胴は頸けてもあるこあても用をさ物あぐつ我方よりて。里賓の為ふくひとふるひくいふ松光矢ひくくゐの對面のひき出物は頭ハつねしまあるちりといつだ。付男よろとぶ事かさりあ。物松光ゲ馬をけくぐ見て天晴の出馬ふくゐ最前より。きぞしぐ程いさくろ嘶ぶふ殺さぐるち名馬乃きくしまて夜中敵陣を懽ひゆよ兵士枚をふくみて音をしてざる時かゐうの馬ちくさまで用ひぐしく物もかぎりちき逸おくゆと追従さてるを。あるくくのちり矢ふ墨縄又松光をして木馬よかなご負ちを。ことを生て行とて松光よ向ひて。かくる戯まを。無益の事ぞしいだ。松光よりまでくふだりいをぐくくよるあくまて面目を消くゆひきて矢ひ

ちく行く一里だりもきて山人ろうぐつよ。あしをくまを見て術あくとて。あゐみくまだ。まぐ日ハ高くまでど付あくりよ。祈りとうぐやとて。手見つ行けぐを人の家あり。入りて。きちくくとのくだ。事と見くて。四十ばりある女の眼きるどげあるぐ出く。我家人をとぐめざ。あよ行きて物せよとさげあくいるよ。足をいくくめくる者のゆひく。あ由みあゐみてゆ。いぐでゆるさせあひて一夜明させあひちんといだ。かの女大ある声して心ちき旅人ちあ。とあぐしいちぐとく出くゆくぐきを。あぐち母何をちいふ。とく生く行きねくいひさ多人くを。つき出て。戸あくくつ。人くハ。あるも情あくねゆちあくゆ男ぐぐ。せんかくあくまだ。きぐく生く行くよ。入戸の内より声して。旅人まぐ待ゆ。ゆぐまと事あり。ちち入りあとゆよ入りて見まぐ。あるぐと見えて。六十ばりの翁の眼盲くるぐ。ちゐ出く。足を病をゆる人のおきまとゆ心ぐるき事あり

少ぐめ、あゝせん、とゝくゝつゝぐんつを。ときわくとゝいくだ。女をたゝぐちゝく
翁をあらみゝく。今雷ハ草飼どのも来んとのゆひゝよ。蔵人をさくゝぐも
ゞゝくはとゝいよ翁耳あるい是ゞく。奥の方を指さゝてかゝとよ離きゝる
家あり入りていまひわゝて。ゝゝをよひつけゝくゝをいざおてせみ
同ゞゝゝゝ。ゆあげのまゝあひあゞ。さゝてあり。くゝハ一間よ入ゝ。あるゞゝ
あゝゝざゝをよゝこびゝゝひゝやさ。松光木馬をば庭の外よ繋て。かゝど
取りて奥よ入ゝんとする時表の方よりゝ人入来りゝの男ハ。大野の
草飼とて。叶女の兄あり。生まつき邪ある者ゝ。ねゝひゝ心ある男あり。
妹を叶主よ遣て後翁が財多く。田畑あゞと持てるゝを見て我物よせやや
と思ひて。かねて妹と計ゝるよ妹も老ゝる男を厭て兄とひゝつよ成りて財
どゝも奪て。叶家を追れ出んのゝゝゝ有り。扨この草飼入来て。妹ゝさゝ並

をゞとて。あゝゝと出ね。墨縄かゝどより。斧鋸あゞと取り出ゝ一時ゞかり
して。何をゝ作りゝん。出ゝ松光よさゝあきて。ゝゝをゝくゝをゝくゝをゝ
松光ひゝゝよ出ゝ。草飼が馬あるゝ。例の木馬をひき行ゝ。鞍手綱をゝ
とり替ゝ。草飼が馬をば。裏の方へ引ゆきて。ゝゝゝあるゞの翁ゝ
宵よりゝ閨よ入りてゝゝ墨縄い山人よさゝやきゝ。今雷ハいねゝゝゝて
眠ゞゝゝゞとゝいひあゝをゝ。ゝよゝゝゝゝゝゝをゝ。夜ゝふけゝ
丑あやゝりねゝんゝ思ゝひゝ。草飼表の方よりゝおき出来ゝゝゝ丑ゝゝ
女よさゝ来て。足音を忍びゝ。主ゞあゝゝゝゝゝゝゝ
よゝゝのねゝゝゝ見えて。息ゞゝよせゞゝ生ゞ。ゝゝゝゝゝゝ。無つかゝて。胸の
あゝゝゝなさゝ通せゞゝ。手足をめゞゝゝのゝゝあゝ。声をゞゝたてゞゝ死てゝゝ。
女かゝどを持来りて。死骸を入ゝんとして。草飼とあゝゝ丑死骸の腰よ手を

草創
妻と
なりて
あるじを
殺し
死骸あくを
おひしりけ出れば
夜人門なる
馬よ
のりてゆく
迯るか

かけつるぞと思ひかけぞ。主の死骸おりくとおきあがりくるまぶ。ぱっとらめて女も
草飼も表の方よりかけ出さ。こは死骸手ゝびおりつゝ猶おひくゝ表の方へ出れば。
おろ〳〵しくて魂も身よりそゝぬ心地してく戸をあゝあけくかけ出ぬ女も同じく
走り出るぞ。草飼あるてくる中あるひさしの外より撃ぎくる馬ひき出ゝみ
をも。かきの世我も尾よ走のりくるよ。こは死骸猶追来ぬるさる地さきぞとく
あるを逃ぞやと手綱をはよく引つるぞ。馬ハ東をさしてぞかけ出くる。幽霊も
追来ぬ中をきぞ。馬をきづくよやらんとさるぞ。こは馬ぞ〳〵もため〳〵ふ
事あゝ一文字よ走る事。たとへぐきよ物あゝ女ハ幽霊よりも。こは馬ぞ魂を
うゝふひく。清入るぞりよあゝくるを男ハ引とくゝ馬のそくるよ手ゝを
くるが。天竜川とのふ川よ入りる時月もくまきまどひて二人とのよ。あゝ丹落ち
てぞ死る馬ハ川をつくゝ猶東をさゝてかけ出さるとぞ。さて墨縄

山人ハ奥より紙燭さゝて表よ出ゝ見るぞ。安堵のおゝ〳〵女〳〵草飼ハ見へず。
ひさしの下ある木馬もあゝねぞ。扨ハたゝりおとのごとく。草飼めゝて。木馬ぞ
おそるゝ走りたるあゝんとのぐ。山人かあらぞ。川よ陥りく命失ひぬべし。
心ゝ。かた面き事ありとのふ松光ぞあゝこの方より。あるじの手をとり出ゝ
雪よひそゝよあせ舎へとも。あひて。とめ今ぞ思ひ居ゝうとのふ羽ゝ
まあゝ丹。不思議の命ひろひ事。よろこびゝ笑えあゝんよ。詞もあゝとふ〳〵
をぐむ。松光月ゝげよ。向ひある方を見ゝ。かゝあるよ人の立ゝ伺ひをるさゝあり。
めゝ草飼めゝが立ゝりたるあゝぞやとつゝくゝと走り行きて。うゝよりぞと
いぐきゝく。汝ハ草飼ぞやと。ぞあつゝまぞ。こは人のゝくもたぞ。手をふまぶ。草飼よ
あゝぬ。あゝぞ。物をゝゝとゝひて。よくゝ見るぶ。昨日墨縄がつくりたる
木偶みて。主の翁のかたを甚まゝよ。うゝえりるあゝりゝ。是ハ松光貴よ

翁を国より引生し、かたりよ什木偶を入置おきしが機関を用ひて、その
木偶のいのちとあるを生んとや思ひざりしとて手をくきてぞ感じける。
夜あけぬれば、人々立寄んとするよ。翁ひとりまもりよとぞあるなどかぎりある
時あり。又あるとき紫りて松光よかをど荷を世て別是く京へぞのぼりくく
ものおきるもりもらまぶー什翁の榛原の某として昔より家よ住まて。西石よりある有姓ありとうかの
木偶い某のちけそくりの寺まつくんて。飛弾の匠が幽霊の像として什あと
あくるが後の世の兵火よ跡もあくありて今ハ某寺の名ぶよまるめは
なくく惜むべき事ありかく

飛弾匠物語巻之四終